

A Gradual Step toward the Theory of Deletion and Epenthesis in Harmonic Serialism: Placeless and Mannerless Segments at the Intermediate Pass

田 中 伸 一
東 京 大 学

1993年の出現以来、OTは派生理論から脱皮して、新しいパラダイムから言語を捉える方法を確立した。その走行性能を可能にした理由として、(ランキングによる制約違反の許容とともに)入力から出力への対応を並列処理に変えたことがある。しかしながら、それが同時にアキレス腱ともなって裏目に出たのが、いわゆる「不透明性の問題(opacity problem)」である。思えば、OTの中で提案されてきた数多の理論改訂というのは、局所結合(local conjunction; Kirchner 1996 et seq.), 共感性(sympathy; McCarthy 1997 et seq.), 出力対応(OO-correspondence; Benua 1997 et seq.), 階層 OT(Stratal OT; Bermúdez-Ostero 1999 et seq.), 表示の濁り(turbid representation; Goldrick & Smolensky 1999 et seq.), 標的制約(targeted constraints; Wilson 2001), 比較有標性(comparative markedness; McCarthy 2003 et seq.)などを含め、もっぱら「不透明性の問題」解決をその目標の中心に据えるものであった。こうした新しい概念を用いた理論改訂は、様々な議論を通して淘汰がなされてきたが、現在この問題解決で有力視されているのが、並列処理を直列処理に回帰させた調和直列モデル(Harmonic Serialism; McCarthy 2007 et seq.)である。

従来の並列 OT と比較して、直列 OT と呼ばれるこのモデルの妥当性検証は、「不透明性の問題」以外にも、類型や獲得(学習可能性)の観点から精力的になされているところである。特に典型的に見て、直列 OT を支持する根拠として挙げられるのが、「修復過多の問題(too-many-repairs problem)」、「有標性階層逆転の問題(markedness reversal problem)」、「随意性連鎖の問題(chain optionality problem)」、「位置的有標性の問題(positional faithfulness problem)」などが解決できる事実である。

こうした流れを受けて、本発表でも、並列 OT では解決できない問題が、直列 OT によりうまく解決できる点を示すことで、後者を支持する根拠をいくつか提供する。具体的な主張としては、このモデルの中心概念の1つである漸進性(gradualness)に基づいて、あるセグメントが削除・挿入される際には、必ず調音位置または調音様式の削除・挿入という中間段階を経た上で、実行される(セグメント全体をいきなり削除・挿入するのは漸進性に反する)ことを示す。つまり、直列 OT の各ループ間(中間段階)において、調音位置や調音様式のないセグメントが存在する根拠を示すことになる。そして、その仮説により、並列 OT では解決できなかった「修復過多の問題(too-many-repairs problem)」、「有標性階層逆転の問題」、「不透明性の問題」などが解決されることで、その仮説が裏付けられることを立証する。